

# 學 會

## 第 39 回大日本耳鼻咽喉科會中國地方會記事

期 日 昭 和 1 3 年 6 月 2 6 日

場 所 岡 山 醫 科 大 學 第 一 講 堂

幹 事 高 原 滋 夫 記

開會の辭 田 中 文 男

### 1. 鼻咽腔纖維腫の「ラヂウム」療法

に就て 松 浦 祐 一

岡 田 要

既に我國に於ても鼻咽腔纖維腫に「ラヂウム」療法を施して著効を収めたる 2, 3 の報告を見、又従來我教室にて、耳手術後に發生したる癭痕「ケロイド」に、「ラヂウム針」刺入療法を施して著効を見たる経験よりして、演者は高度の鼻閉塞と折々起る多量の鼻出血を主訴とせる、42 歳及び 44 歳の男子に於ける鼻咽腔纖維腫患者 2 例に、鼻腔内より「ラヂウム針」の腫瘍内刺入を行ひ、約 1000 「ミリグラム」時照射せしに、豫想以上の良結果を得たりとて、本症に對する「ラヂウム針」刺入療法の應用を奨めたり。

追加 山 口 治

余は下顎小白並大白齒の側縁に發生せる「エプーリス」を手術的に摘出せんとせしも、基底面が廣くして全部之を除去し得ざりし爲、遺殘部に「ラヂウム」400 mg 時照射せしに、半年後の今日全く全治の状態に達せるを見たり。「エプーリス」は纖維腫と肉腫との混合型にして、演者の述べられたる鼻咽腔纖維腫と略ぼ其組織を同じうし、然も「ラヂウム」により著効を見たる點に興味を感じ茲に追加せり。

### 2. 「ラヂウム」照射により著効を得たる口蓋瘻の 1 例

原 良 太 郎

患者は 23 歳の體格營養共に中等なる既婚婦人。初診 3 日前より突然咽頭痛を來し、受診せるものにして、診るに咽頭粘膜は輕度に發赤し、軟口蓋中央部に 3 個の米粒大の穿孔ありて、其周圍に白苔附着す。此部の細菌學的検査により連鎖狀球菌を認め、尙試験的組織切片に於ては炎症性壞疽性變化を見たり。血液の W 氏反應は陰性。赤血球 348 萬、白血球は 6600 にして其組成は殆ど正常なり。然して本患者に於て藥物療法、紫外線療法を以て治療に努めしも、穿孔は急速に擴大し、初診後 5 日目には各穿孔癒合し、懸垂垂殆ど消失するに至り、4 箇月後に於ては瘻口の爲全軟口蓋消失し、硬口蓋も齒齦部迄壞疽を來し、食物攝取の困難並睡眠障礙を來せり。茲に於て萬策盡きて試みに之に「ラヂウム針」刺入療法 (600 mg 時) を行ひしに病勢の停止を來し得て、其後再び 1500 mg 時照射せしに、患者の自覺症状は全く消失し、單に開放性鼻音を訴ふるのみとなれり。演者は本例に於て、之を特發性瘻とすべきか、或は「ラヂウム」の効果を齎せし點より進行性の腫瘍なりしか判然たらざるも、何れにせよ其諸症状を「ラヂウム」により頓挫的に消失せしめ得たるは興味深きところなりと述べたり。

### 3. 急劇なる経過を取りし咽頭

#### 蜂窠織炎 龍 治 好 道

患者は39歳の男子にして、肺炎の輕快後嚥下痛を來したるも平熱なる爲放置し居たるに、3日目には發熱38.8°Cに及び、前頸部に緊張せる腫脹を來し、4日目の夜より輕度の呼吸困難を伴ひたるにより、5日目朝來院せらるものなり。診るに患者は既に多少意識朦朧とし、無氣力状態にして、頸部前面竝に側面(殊に左側)略ぼ甲状軟骨の高さに至る迄、輕度に發赤し、緊張せる腫脹を呈し、咽頭内に於ては兩側口蓋扁桃腺は發赤し、兩側側索、殊に左側のそれに沿ひては著明なる發赤腫脹あり、更に舌根扁桃腺竝に會厭も同様に發赤腫脹せり。呼吸は極輕度に障碍され喘鳴を聴取し得。體温は入院時39.3°C、脈搏は既に微小頻數にして緊張惡し。以上の所見よりして今後腫脹の進行し、益々呼吸困難の増加するを豫測し、直ちに氣管切開を施すと共に「フロントシル」、連鎖状球菌血清の注射竝に輸血、其他水分の補給を行ふの傍ら強心劑の注射を施したるも、漸次外頸部竝に咽喉内腫脹は増加し、同日夕刻よりは意識全く不明に墜り、咽頭痛を訴へしより6日目に遂に死亡せり。本例は急性口蓋扁桃腺炎より極めて激烈なる咽頭蜂窠織炎を惹起し、其進行は急劇にして頸部上方より下方に進むと共に、一方血液中毒症狀を呈したるものにして、之に對し早期に氣管切開を施すと共に、極力對症療法に勉めしも効果を實し得ざりしものなり。顧るに、本例に於ては初診時既に病勢の著しく進行し居たるものにして、今少しく早期に之を診るを得ば、或は救ひ得たらんやと思はると共に、更に又本例に於ても初診時直ちに頸部腫脹に深き切開創を加へみたらんか、或は効果を來し得たるやもしれずと思はる。

### 4. 咽頭口蓋癒着症の1例

#### 山 田 武 夫

患者は42歳の女子。咽頭後壁は癩癩性にして

口蓋弓の一部分は破壊せられ咽頭後壁と密接に癒着し、鼻腔と口腔とは懸垂垂に相當する部位の組織缺損による小孔によつて交通せるのみなり。患者は病歴に於て、鼻腔、咽頭の外傷竝に藥物腐蝕等を否定し、尙微毒血清反應は陰性なりしも、恐らく先天性微毒により幼時咽頭の潰瘍を患ひ、その治癒により癩癩癒着を來せるものにあらずやと思はせらる。本患者は難聴の治療を希望して來院し、其際咽頭内癒着症を發見せるものにして、難聴の治療に満足し、咽頭内癒着症の治療を奨めしも終に手術に應ぜざりき。

### 5. 赤痢の経過中發生し頸部壞疽を續發せる口蓋扁桃腺周圍膿瘍の1例

#### 山 田 武 夫

患者は57歳の婦人。赤痢の経過中突然咽頭痛を見、竝に左頰部より側頸部に互る腫脹を來せり。診るに左口蓋扁桃腺及び其周圍は著明に腫脹し、波動を證明し、頸部の皮膚は暗紫色にして、左頰部より耳下部に互つて廣汎性腫脹を呈し、浸潤強く左頸下部は木板様硬度にして波動なく壓痛あり、扁桃腺周圍膿瘍及び深部頸部蜂窠織炎疑症の診斷の下に、先づ扁桃腺周圍膿瘍の切開をなし、約1週間経過を觀るに、外頸部の腫脹は却つて著明となり、試験穿刺によつて膿汁を證明するに至りたるをもつて、胸鎖乳嚙筋の前縁に沿つて下顎骨隅角より殆ど鎖骨上に至る大なる切開を加へ、副咽頭間隙竝に上縦隔嚢を開放し多量の排膿をみたり。然るに其後創面は壞疽に陥り擴大し、重大なる頸部合併症の招來を危懼せしめたが、幸ひ種々なる對症療法によつて、壞疽は比較的速に脱落して順調に治癒の経過をとりたり。本例は赤痢による個體抵抗減弱に際し、毒力強き連鎖状球菌による潜行性扁桃腺炎より、扁桃腺周圍膿瘍、副咽頭間隙の膿瘍を招來し、これが側頸部に擴がり頸部壞疽を來せしものにて、本例が幸ひ重篤なる他の頸部合併症を見ることなく治癒せるは、比較

的早期に行ひたる徹底せる頸部外切開による所大ならん。

追加 山口 治

本例の如き老人にして、斯かる進行性炎症を伴ひたる際は通例死亡する事多く、最初余も本例の豫後は駄目なりと思ひ居たるも、幸に之を救ひ得たるは、療法として使用したる「フロントジル」、「グイタミン」Cの効果に歸せしむべきもの大なりと信ず。

追加 細見 英

確かに扁桃腺周囲膿瘍なりと思はるるに拘らず、往々試験的穿刺によりては膿汁を證明し得ざる事あり。余は最近斯かる3症例に於て進んで、扁桃腺摘出術を敢行せしに、癒着も軽度にして想像以上に出血少く、容易に摘出を行ひ得、又其際膿汁の滲溜は副咽頭間隙に存するを認め、同時にその膿瘍腔の解放を行ひ得たり。余は之等3例に於ける経験より今後斯かる症例に於ては、膿瘍時扁桃腺摘出術を試みんとする者にして、諸君の追試を希望す。

追加 田中文男

扁桃腺周囲膿瘍に際し、膿瘍時扁桃腺摘出術を行ふべきや、將又膿瘍の切開後炎症の去るを俟ちて扁桃腺摘出を行ふやに關しては、種々議論の存する處にして、簡単に何れを宜しとするを得ず。但し只今細見君の述べし如き症例に於ては、確かに膿瘍時扁桃腺摘出術を選ぶべきものならむ。

6. 嗅覺障碍症に對する「カンフル劑」

注射療法 守屋 誠

演者は6例の嗅覺障碍症患者に就き、「カンフル劑」たる「ガダミン」の靜脈内注射療法を施し、自覺的には患者の嗅覺恢復に對する自覺的申出でによると共に、又他覺的にはツワルデマツケル氏嗅覺計を應用し、夫の恢復如何を觀察したり。然して内4例(嗅覺減退者)に於ては全治し、嗅覺脱

失者の2例に於ては各4回の注射を行ひたるも未だ尙効果を見るに至らざりしを報告し、之よりして嗅神經末梢に於て幾分たりとも嗅覺機能を残存せりと思はるる症例に於ては、本法により嗅覺機能の恢復を齎し得る事あるを指摘し、從來適當なる療法なしとして稍ともすれば放棄せらるる事多かりし嗅覺障碍症に對し、一應本法の試用を奨むと述べたり。

追加 志水 清

余も石川氏の報告を讀みて興味を覺え、3例の嗅覺脱失者に「ガダミン」の注射を行ひたるが、内1例のみ6回の注射により嗅覺の恢復を來し得たり。

7. 電氣刺戟に依る聽覺に就て

佐藤 信也

最近 Volokhov 及び Gersuni は蝸牛殻を交流電氣を用ひて刺戟し、以て聽覺を起さしむる事に成功したるが、余も亦「オーディオメーター」に一段増幅装置を加へて之を追試して此事實を確むると共に、更に次の如き實驗を行ひて其本態に就ても聊か考案を加へたり。

1) 尖端を食鹽加「ゲラチン」中に埋没せしめたる電導子を耳内に挿入使用するも聽覺を起し得。反之硝子管の尖端に護膜を貼り、管内に兩極と食鹽水とを封入したるものを電導子とするに此際は聽覺なし。即ち感覺は電導子自體の振動、食鹽水中の生ずる氣泡音或は分極現象に基く鼓膜の振動に因すものとは考へられず。

2) 減壓「タンク」内にて氣壓を減少(又は増加)せしむる時は、氣導、骨導共に著明の影響あるも電氣刺戟にては殆ど變化を見ず。

3) 電氣刺戟に於ても兩側性或は4側性唸音存在す。(「オートアウヂオン」を併用せり)

4) 電氣刺戟に依る聽覺は一般に疲労し難きも、極度に強き電流に依つては疲労す。其際疲労恢復には長時間を要し、又著明なる耳鳴残存す。

5) 12例の聾啞者に於ける検査成績に依れば、氣導又は骨導は必ずしも一致せざれども、矢張り殘聽を證明し得る者多し。家族性遺傳性聾と考へらるる2例に於ては殘聽缺損す。

以上より見れば、電氣刺戟に於ては外聽道又は中耳にて音を生ずるとは考へられず。他方唸りの存在せるより見れば、直接聽神經を刺戟するものに非ずして、寧ろ2次的に之を刺戟するものならん。

## 8. 鼓膜穿刺に因る失血死

遠 藤 巖

患者は1年5箇月の女児。家族歴に於て、姉が生後1年にして黃疸を伴ふ不明の疾患に罹りて死亡せり。現病歴は3箇月前より黃疸現はれ内科醫の治療を受くるも輕快せず、初診の9日前、左側耳漏少量に有るに家人氣付き、某耳科醫を訪ひし處、同側耳のみならず、右耳も亦中耳炎なりとて直ちに右側鼓膜穿刺を施されたり。術後右側外聽道より血液が少量宛引續き流出する爲、同夜再び同一醫師を訪ひしに、長き「ガーゼタンポン」を施されたるも、翌日の晝まで可成りの出血續き、其後も少量乍ら出血持續す。依つて止血の爲、第2、第3の耳鼻咽喉科醫を訪れたるも其目的を達し得ずして、最後の醫師の紹介にて診察するに至りしものなり。患者は一見著明なる黃疸並に貧血を有し、肝、脾の腫脹をも證明す。但し皮膚に出血を認めず。右側外聽道より「タンポン」を滲透して稀薄なる血液可成り多量に流出し居り、出血多量なる爲鼓膜の状態、殊に頸靜脈球鼓室内裸出の有無等詳ならず。血液の種々なる検査、尿検査等の結果に家族歴をも併せ考へて、溶血性黃疸に因する出血性素因有る爲、鼓膜及び鼓室粘膜炎の損傷部より出血を來せるものと診断せり。療法としては、右側外聽道に硬く「タンポン」を施し、種々の止血劑、「ビタミン類」の注射、輸血等をなせしに、入院後4日目には出血量非常に減少し、代つ

て膿汁中等度に出づる状態なりしも、6日目より又々多量に出血し、血液は歐氏管を経て咽頭内に流下するを認むるに至りたり。大便にも血液多量に混じ暗赤色便を見、斯くして外聽道よりの出血は遂に止る事なく、入院後10日目に失血による心臟衰弱にて死亡せり。鼓膜穿刺は耳科醫の日常最も屢々行ふ手術の1にして、通例殆ど何等の危険を伴はざるものなりと雖も、極く稀に之により大出血を來したる報告(今日迄に10數例)有り、其大多數は頸靜脈球の鼓室内裸出の有る場合、之を損傷したるに因すとせらる。然して之等大出血を來せる例も大多數は又止血して一命を全うせるものなり。故に本例の如き不幸なる例は極めて稀有なるものにはあらんも、此患者の如く長期に亙る黃疸を有し、多少共出血性素因有らんと、直ちに想像せらるる場合の如きは、如何に小なる觀血的操作なりとも、之を行ふには大いに慎重なるを要すべしと述べたり。

追加 田 中 文 男

演者の例とは少し趣きを異にするも、余は最近、兩側耳の搏動性耳鳴並に難聽を訴ふる18歳の婦人に於て、其兩側鼓膜の臍部に左右共に略ぼ粟粒大の紅色陰影を認むるに遭遇し、之に歐氏管通氣法を行ひたるに、鼓膜は克く膨隆し、實際「オトスコープ」にて患耳と檢者の耳とを連結し、心音と同様なる搏動性雜音を聴取し得たり。尙鼓膜を運動せしむるに、鼓膜内側の紅色點も共に運動するを認めたり。然して余は試みに、本例の1側耳の紅色點に細小針にて鼓膜を通して穿刺を行ひたるに、恰も動脈血を思はせる如き鮮血の搏動性逆出を來し、壓迫「タンポン」にて實に辛うじて止血するを得たり。本例の紅色點は恐らく鼓室内に生じたる動脈瘤ならんと思はれ、其位置的關係より馬鐙骨動脈より生じたるものに非ざるやと思はる。何となれば足立文太郎博士の研究に、馬鐙骨動脈は普通成人に於ては微細動脈に退化するも、

稀に相當大なる動脈として存する事ありとの記載あり。尙又、曾ての當地方會に於ける高原の報告の如く、鼓室内に動脈瘤の生ずる事ある事實あればなり。

#### 追加 高原 滋 夫

余は18歳の男學生に、扁桃腺摘出術を行ひしに、術中創面全體よりじりじりと滲出する如き實質性出血を來し、容易に止血するを得ずして實に困却せる折柄、兩親の語るところにより、同患者は曾て抜歯後2箇月間も後出血續き衰弱せる事ありし事實を聞くに及び、本例の出血性素質たりし事を知り、自己の術前の注意の粗漏なりしを深く愧ぢたる經驗あり。鼓膜穿孔に於てすら演者の如き不幸例を來す事あり。況や扁桃腺摘出術の如き大なる手術に於ては、必ずや病歴に溯り斯かる素因の有無に充分注意するを要すと今更乍ら痛感したれば敢て追加せり。

#### 9. 「ヂフテリー」性 中耳炎並に創面「ヂフテリー」に就て 高原 滋 夫 谷 豊

中耳「ヂフテリー」の場合、鼓膜表面に白き義膜を有し外聽道内の汚穢甚しくして、自づと「ヂフテリー性」中耳炎を疑はしむるものありと雖も、又他方、普通の化膿性中耳炎の際の鼓膜所見と何等異なる所なく、單に膿汁検査によりてのみ、本症たるを知り得るが如き症例も敢て尠からずとて、演者は最近經驗したる後者に屬する4例(小兒3人、大人1人)に就て報告したり。之等は何れも適當なる方法によりて膿汁を充分排除し居るに拘らず、既に3週日を過ぐるも輕快の徴候を示さず、さりとて悪化する傾向も示さず、在再時日の経過に委ねられしものにして、偶々膿汁の検査により、膿汁中に「ヂフテリー」菌を多量に存するを知り、直ちに「ヂフテリー」血清注射を行ひて頓挫的に之等を治癒せしめ得たる症例なり。されば中

耳化膿症に際し、膿汁の排除に勉むるも一向治癒を來さざる場合に於ては、特に小兒の際に於ては、一應中耳「ヂフテリー」を考慮し、此方針の下に膿汁の検査を試みるを良しとすと述べたり。更に演者は乳嚙突起炎(起炎菌は葡萄狀球菌並に連鎖狀球菌)の手術後、1—2週日の後に於て、創面に白き汚穢なる義膜を生ぜし3例に遭遇し、細菌學的検査により「ヂフテリー」性義膜なるを知り血清注射並に血清液を浸したる「ガーゼ」を挿入する事により、約10日間にして之等義膜を除去せしめ得たるを述べ、其創面の所見を圖によりて紹介せり。尙その傳染経路として、斯かる創面「ヂフテリー」が往々同一時期に簇出する點より外部よりの接觸傳染も一應考慮さるるも、又鼻咽腔に存し、「ヂフテリー」性症状を現はすに至らざりし「ヂフテリー」菌の、歐氏管を経て創面に達する事も可能にして、演者の症例はその何れの経路たりや判然たらずとせり。

#### 追加 田 中 文 男

演者は創面「ヂフテリー」の傳染経路として、外部よりの接觸傳染、及歐氏管を経て「ヂフテリー」菌の創面に傳染するの2方法を挙げられたるも、余は更に原因たる中耳炎の起炎菌中に「ヂフテリー」菌の存在し、本症の惹起さるる事あるを追加せんとす。

#### 追加 登 坂 清 喜

予は嘗て、急性化膿性中耳炎にて既に耳後部に腫脹壓痛を生ずるに至りたる1男兒に於て、患家に手術の避け得べからざるを宣告したるに、偶々咽喉頭に「ヂフテリー」様の義膜の存在を認め、依つて血清注射を試みし處、義膜の消失せるのみならず耳漏も頗る減少を來し、耳後部の腫脹壓痛も消失し、手術を行はずして全治せしめるに至り、醫師として赤面したる經驗あり。本例は恐らく「ヂフテリー」性中耳炎なりしものなるべく、演者の述

べられたる如く起炎菌の検査の必要なるを教へられたるものなり。

討論 山 口 治

川本君は曾て小學生の中耳炎の起炎菌を詳しく検査し、殆ど總ての中耳炎に「デフテリー」様桿菌の存在を認めたる事あり。次に演者は鼓膜所見として義膜の存する場合は、容易に之を「デフテリー」性なりと診断し得ると述べられたる如きも、實際上鼓膜表面の汚穢にして義膜なるや如何の判然たらざるものあり。

追加 守 屋 誠

生後 11 箇月の男児、3 箇月間に互りたる急性中耳炎にして、最初中耳分泌液中より双球菌を検査し得たるも、後期に至り、耳内及鼻咽腔に特に「デフテリー」性たるを惟はしむる義膜其他の特別の所見を呈せざりしに拘らず、中耳分泌液より中等量の「デフテリー」様桿菌を證明するに至り、直ちに血清注射を行ひたるに、頓挫的に之を治癒せしめ得たる経験を追加し、本例は演者の述べたる症例と相似、斯かる中耳炎は、血清注射により好結果を齎し得る事多きが故に、臨牀上注意すべきものなりと述べたり。

答 高 原 滋 夫

諸氏の御追加に感謝す。

田中教授の指摘せらるる如く、中耳炎其物が「デフテリー」性のものなる場合、又は分泌物中に「デフテリー」菌の混在し居る場合、該菌の感染により創面「デフテリー」を來す事あらんとは容易に想像さるる處にして、斯かる経路のあらんとの御注意に感謝す。茲に紹介したる 3 例に於ては、1—2 回の起炎菌検査に於ては「デフテリー」様桿菌を證明し得ざりしと雖も、日常臨牀上余等の行へる起炎菌塗抹標本にては、其起炎菌の大體を識り得るのみにして、又數同時期を異にして之の検査を行ふに非ざれば、「デフテリー」菌の存在を否定し得ず。されば余の症例に於ても田中教授の御提唱

の如き傳染経路をとりたるやもしれず。山口博士の述べらるる如く、小兒の中耳炎膿汁中には多少に拘らず「デフテリー」様桿菌の存在する事多からんも、余の茲に述べたるは、塗抹標本にて「デフテリー」様桿菌の恰も培養基に存在するが如く多數交錯存在し、該桿菌が膿汁中の起炎菌の主體をなすと思はるる場合を意味したり。次に鼓膜の汚穢甚だしくして、假令それが「デフテリー」性なりとすも鼓膜上に附着せるもの果して義膜なりや否やの判然たらざる事あるは余等も屢々経験せる處なり。されど斯かる場合は之が「デフテリー」性中耳炎に非ずやとの疑を抱くの動機となり、自づと膿汁中の起炎菌を検査するに至るも、然様な所見を呈する事なく、即鼓膜所見は普通の中耳炎と何等變る所なきに拘らず、該中耳炎の「デフテリー」菌によるものありて、斯かるものに於ては兎角「デフテリー」性のものたるやの疑に拘らずして、折角の血清注射も應用せられずに終る事あるを茲に注意したるなり。

10. 腦膿瘍の再發 瀧 口 一 雄

耳性腦膿瘍は之を切開排膿し、既に見全治の状態に達するに至るも、其後長期間に互り充分なる注意と警戒を怠るに於ては、再發増悪を來すことあり。患者は「ムコーズ」中耳炎より健忘性失語症を伴へる耳性腦膿瘍を來せし 19 歳の男子にして、膿瘍の切開排膿後、膿腔周圍に包圍性の結締組織増殖を來せしめ、以て腦軟化を防ぐ目的の爲、約 80 cm の長さの「フォルムガーゼ」を膿腔中に挿入し、少し宛「ガーゼ」を切断除去する方法を選び、32 日目に「ガーゼ」を全部除去したり。斯くして患者は諸症狀消失するの他、全く元氣を回復し、膿腔は小さく存するも排膿は皆無となり、於茲患者の希望もありて膿瘍切開後實に 77 日目に退院を許可し、以後病院前に下宿し嚮來交換に通院し居たり。然して乳突突起炎手術創の肉芽の増殖も良好にして、全治を待つみの状態にありし

に、退院後52日目の朝より前額部に強き頭痛を來し、悪心強く食欲全く缺如するに至り、依つて直ちに既に殆ど肉芽にて閉鎖し居たる乳嘴突起手術創を開大し、腦膿瘍存在の部を精査せしに、果せるかな、同部位の深部より濃厚なる膿汁約5立ccを排除するを得、長期間一見治癒の状態にありし腦膿瘍が、再び増悪せしものなるを知りたるものにして、其後治療に全力を盡せしも、今回は日増悪し腦膿瘍切開後150日目に遂に死亡せり。然して本例に於て教示されたる點は、死後知りたる事なるも、患者は腦は既に全治せるものと信じ、通院中時々發來せし頭痛に對しては専ら内科醫の治療を受け居たりし事にして、腦膿瘍の經過中其症狀に就き患者のみならず、醫師に於ても今一步慎重なる警戒を有したらんか、或は再發を早期に發見し得て、之を救ひ得るの機を獲たらんやも知れず。

#### 追加 高原 滋 夫

余も演者と共に本例の治療を分擔し居たる1人にして、本例より教へられたるは演者の述べられたる如く、腦膿瘍の治癒と云ふ事は、短期間の觀察によりては之を斷言し得ずして、諸症狀が去りたる後も、相當長期間再發と云ふか、再び悪化する事あるを恒に警戒し居るべきなりと云ふ點なり。最近キー・ルツテンも其點を強く注意し、諸症狀が殆ど消失するも、尙數箇月乃至1年間位は其後の経過を充分觀察注意するを要し、然る後に非ずば全治と云へずとし、ケルネルの症例に於て、潜伏せる状態にありし腦膿瘍の1年3箇月後に破壊せるを引用し居れり。殊に本例の如く起炎菌が「ムコーズ」菌なる際には、殊更再發に就ての絶えざる警戒の必要なるを痛感せり。

#### 11. 2箇月餘に互れる 持續的腦脊髄液 排出により治癒せる 耳性化膿性腦 膜炎 小田 醇 太郎

耳性化膿性腦膜炎の療法の主要要件が原病菌除

去の外に腦脊髄液の充分なる排出にあるは、今や諸家の等しく認むる所にして、特に之が持續的排出法の考按工夫せられて以來、本症治療の成績に見る可きものあるは大いに注意す可し。演者は佐藤某なる13歳の少女にして、左側慢性中耳化膿症に腦膜炎を繼發せるものに對して、一方それが原病菌の徹底的除去を計ると共に、他方藥物的療法と共に主として田中一小田氏持續的腦脊髄液排出法に據り極力腦脊髄液の排除に努め、72日間の長きに互る持續的排除に成功、終に之を救ふを得たる經驗を紹介し、此間採取せし腦脊髄液總量は實に23430.00ccに達せしものなるが、本例の如く來院時既に腦膜炎の諸症狀を完備せる重症例に於ても、之をよく治癒に至らしめたるは持續的排出法に負ふ所多しと述べ、尙斯く長期に互り而も大量の腦脊髄液を採取せるにも拘らず、患者の腦神経系統に何等認む可き障礙を貽すことなく治癒せしめ得たるは多少の注意を拂ふ可き事項なりとし、本症の經驗より得たる持續的腦脊髄液排出法撤廢の時期に關する感想に就ても言及せり。

#### 質問 山口 治

腦膜炎治療に當り腦脊髄液の排出を行ひ、これによつて患者が治癒に赴きたる場合、如何なる時期に於て腦脊髄液の誘導を中止す可きやに就ては實際上大いに迷ふことあり。腦脊髄液所見の正常値にかへりて後大體幾日目位に腦脊髄液排出を中止さるや。

#### 答 小田 醇 太郎

これに對しては、症例個々により其趣を異にするものなれば、一定の時間的規定を定め難きが如し。然し本例の經驗よりしても、患者の一般状態が其腦脊髄液所見と共に回復し來たれるが如き場合に於ては、假令其際腦脊髄液所見が全くは正常値にかへらずとも、可及的早期に一應腦脊髄液排除を中止し、其後随時腰椎穿刺を繰返して其所

見に注意しつつ其後の経過を観察する方よろしからずやと思考す。

追加 西村伊勢松

耳性脳膜炎に於て脳膜炎症状は殆ど全く恢復し、腦脊髄液も肉眼上は既に清淨となりたるに拘らず、該液を顯微鏡的に検査するに、尙久しく多數の膿球及細菌を證明する事ありて、斯かる場合は實際上腦脊髄液排除法中止の時期に迷ふものなり。然して之が時期の判断に當り必要な事は、此細菌が未だ尚生存せるものなるや、將又死亡せるやを知る事にして、既に細菌の死亡せる場合に於ては、塗抹標本にて細菌の形状並に染色性が發病當時のものより著しく變化し、形態は縮少し強く濃染され、他方之等の液より細菌の培養を試むるも其發育を認めず。されば余は一般症状良好にして、腦脊髄液は肉眼上略ほ清淨なるも、尙液中に細菌の存するが如き場合に於ては、該液より菌の培養を試み、培養の成功せざる時期に至りて排除法の中止を行へり。

追加 田中文男

演者は本例に於て、簡単に持續的排除法により諸症状並に液の性状輕快し治癒せしめ得たる如く述べたるも、實際は波瀾重疊の後に漸く其努力の報いられ治癒せしめ得たるものにして、其間數回液の排出悪しきに陥り、遂に後頭下穿刺をも行ひし事あり。然して又持續的穿刺針を拔去したる後に於ても、一般症状に充分注意をしつつ、適當の時期を置きて、再三腦脊髄液の検査を行ひ、絶えず液の性状に注意を向け來りたるものにして、本例に於て穿刺針拔去後再び諸症状並に液の性状の悪化を來せし事も再三に止らざりしも、遂に全治を來したるものなり。されば、既に一旦液の性状全く良好となり、穿刺針を拔去したる後に於ても、尙諸症状に充分注意すると共に、更に又時々腰椎穿刺によりて液の性状を検査し進むを要す。

## 12. 手術により治癒せる錐體蜂窠化膿の3例 黒川孝一

急性乳嘴突起炎の手術後、發熱、頭痛等消退せず、且又乳嘴窠乃至外聽道よりの分泌物減少せずして、尙化膿蜂窠の錐體尖端に在るを推知せしめたる3例、而も其中1例は、既に之より化膿性脳膜炎を惹起し居れる者にして、之等に對し、更に手術創を擴大し、又は根治手術に改め、之より錐體蜂窠を開放、膿汁蕩瀦を發見し全治に導ける經驗を報告せり。而して演者は、錐體蜂窠化膿に對し種々なる手術法の提案され居るも、斯かる特殊にして複雑なる手術方法によらずとも、注意と熟練により蜂窠を追求せば、普通の手術創よりも、迷路周圍及び鼓室上窩又は歐氏管周圍に連續せる錐體蜂窠を開放し得て、良好なる結果を得るものにして、之臨牀上大に注意すべき所なりと述べたり。

## 13. 術後性出血に對する少量輸血の止血的効果に就て 細見英

耳鼻咽喉科領域に於ける手術後の出血に對しては、局所の壓迫、縫合、止血劑の使用によりて通例之を止血し得るものなるが、時に之等處置を以てしては其効果を來し得ざる場合も尠からずして、斯かる場合の術者の焦慮苦惱は譬ふるに言葉なし。演者は扁桃腺切除後1例、扁桃腺摘出後3例、篩骨蜂窠鼻内手術後1例、上顎齶蓋腫症手術後1例の7例に於て頑固なる出血に遭遇し、輸血により幸ひ之を止血し得たるが、其際夫等7例に於て試みに10—20ccの靜脈内輸血を施し、頓挫的に止血を來し得たる經驗より、斯かる場合少量輸血の効果の見べきものあるを知り、其後既に10餘例に之を追試し、良好なる成績を得たりとて本法の試用を推奨せり。次に演者は同型の血液を靜脈内に少量輸血せる場合に於ても副作用の伴ふ事尠からずとて、O型の患者にO型の血液10ccを靜脈内に注入し惡寒戰慄を伴ひたる經驗を述べ、



斯る患者に少量血液の皮下注射を反覆施行し、遂に止血し得たる経験ありとて、操作簡單にして副作用の尠き少量皮下輸血法は、血管内少量輸血法と共に、術後性出血の場合試むべき方法なりと述べたり。

#### 14. 高度の呼吸困難を來せる聲門下

「オチエナ」の手術的治驗

細見 英  
家永 實

患者は9歳の男兒、2,3日前より感冒氣味にて咳嗽あり、内科醫の治療を受け居たるに、昨朝より38度内外に發熱し、聲音嘶啞と共に呼吸困難を來したり。爲に耳鼻咽喉科専門醫の治療を受け、千倍の鹽化「アドレナリン」0.25 cc注射を3回行はれたるも輕快せず、或は上行性「ヂフテリー」に非ずやとて血清注射を施行せられたるが、呼吸困難は漸次増悪し、午前1時往診診察せるものなり。現症は咳嗽犬吠様にして、高度の呼吸困難ありて吸氣時心窩部は陥没す。胸部には異常を認めず。鼻腔は正常にして、咽頭は粘膜一般に發赤するも義膜なく、特に咽頭粘膜の高度に乾燥せるが注意をひくのみなり。喉頭は兩側聲唇の輕度の發赤腫脹の他には著變なし。何れにせよ氣管切開を必要とし、直ちに之を施行し、切開孔より聲門下腔を見るに、黒褐色の惡臭を放ち乾燥せる「クルステ」が充滿せるを知り、之を除去したり。其後病室の濕潤を保ち、水分の補給、「ビタミン」C劑の注射を行ひたるに、1週間に套管拔去、2週目にして全治せり。演者は本例に於ては上氣道殊に聲門下に粘膜の著明なる乾燥性炎症が起り、「クルステ」の増成蓄積によりて呼吸困難を來したるものにして、聲門下「オチエナ」と診斷するを適當ならんとし、感冒氣味の患者に漸次呼吸困難を來したる場合、「ヂフテリー」、假性「クループ」の他に、稀には聲門下「オチエナ」の如きも夫の原因たり得る事あるを注意し、此際咽喉頭の極度の乾燥状態は多

少此診斷に對する補助所見たり得と述べたり。

#### 15. 顔面頸部射創症例

北野伊八郎

顔面頸部射創の症例を普通寫眞並にレントゲン寫眞にて示し、更に特に顔面盲管銃創數例に於ける彈丸摘出の經驗に就て述べたり。

#### 16. 耳性化膿性腦膜炎に於ける腰椎弓

截除に就て 山口 治

演者は最近耳性化膿性腦膜炎に腰椎弓截除手術を試み卓効ありし1症例を報告し、併せて過去3箇年間に於ける數例の經驗より手術法、術後の處置に關し次の如き意見を述べたり。

- 1) 手術時に於ける患者の體位は、全身麻酔の際は肺及び心臟を考慮し左側を上方とし僅かに斜側位にするか、又は側臥位とす。
- 2) 背筋剝離の際は豫め腰動脈の小枝を筋と共に結紮する。
- 3) 骨出血には止血蠟にて略ぼ止血の目的を達し得。
- 4) 管腔切開は最初は1cm以内の小切開を加へ、之にて不充分なる際のみ更にそれ以上に擴げる。
- 5) 術後出來得れば數日間斜側位又は腫位をとらしめ、日々相當多量のリンゲル又はロツク氏液の注射をなす。
- 6) 從來行はれつつある藥物療法の外「グイタミン」Cの注射も相當効果ありと信ず。

#### 17. 臨牀瑣談

1. 多發性癌腫に就て
2. 手術後再發せる喉頭癌の「ラヂウム」療法による治驗例
3. 腺樣增殖症手術後の嚥下肺炎
4. 乳突突起炎手術創の治癒後に於ける電擊性化膿性腦膜炎

田中 文男

### 1. 多發性癌腫に就て

同一人に於て、2箇所又は3箇所の異なりたる器官に、同時に癌腫の發生する事あるは既に成書にも記載せる所にして、其頻度は癌腫症例の1.8%なりと。演者は最近、右軟口蓋の部に小指頭大の癌腫を有する患者に於て、更に右側舌縁にも中心に潰瘍を有する硬結の存するを認め、後者を手術的に摘出し、組織的に癌腫なりしを認めたり。然して本例の癌發生は種々の點より恐らく別々の發生因子によるものならんとし、本例に於ける經驗よりして斯かる症例に於ては、異なる部位の癌を各別人が有するが如き方針にて治療を進むべきなりと述べたり。

### 2. 手術後再發せる喉頭癌の「ラヂウム」療法による治験例

昨年6月當地方會に於て、演者は外科醫により手術的治療を受けたるも再發を來したる口蓋癌患者に「ラヂウム」針刺入療法を試みたるに、其後3年8箇月を経過するも再發せざる症例を報告したる事あり。今回報告せるは、右側假聲帯に發生せる癌腫患者(69歳の男子)に、昭和11年3月喉頭鏡開術を施したるに、3月後喉頭内手術部に「ポリ-プ」様腫脹を來し、組織的に癌の再發を來したるを確めたるが、之に「ラヂウム」針刺入療法(1584時)を行ひしに、其後滿2年餘を経過せる今日に於ても再發を來し居らざるを診たるものなり。演者は本例は或は此儘永久的治癒に赴くものに非ずやとし、之等兩例よりして、再發せる癌腫にも「ラヂウム」の著効を來す事あるを注意すると同時に、癌腫に對する「ラヂウム」療法も、其使用方法を考究する事によりて、今後更に其將來を拓き得べけんと思へたり。

### 3. 腺様増殖症手術後の嚥下肺炎

哺乳兒の腺様増殖症は從來比較的少きものの如く考へられたるも、實際は然らずして我教室に於ても最近6年間に、本症にして之が手術的療法を

加へたるもの13例あり、何れも好結果を得居れり。之に倣ひて最近、生後4箇月の早産男兒にして、呼吸時の雜音と哺乳困難を主訴とせるものに於て、之が原因の腺様増殖症によるものなるを知り、両親に勸めて特製のベックマン式小輪状刀を用ひて之を摘出したり。手術後多少出血ありしも從來の好結果に慣れ、意に介せず放置し居たるに少量の出血續きしも之を嚥下し居たるか、外見上一時出血止みたる如く見えたり。然るに夜に入り口中より血塊を吐くに至り、始めて出血の手術後引續き存せるを知り「ペロック」の「タンポン」、輸血等を行ひ、漸く2時間後止血し得たるが、翌日午後嚥下肺炎を合併し3日目死亡せり。本例は術後出血に對する充分の注意を怠りし失敗例にして、此際の出血は恐るるに足らずして適當な方法により止血をし得るも、殊に哺乳兒に於ては両親の氣付かざる間に出血の肺に流入し、斯かる合併症を來す事あれば、手術後の出血に對しては充分なる注意を要すと述べたり。

### 4. 乳嘴突起炎手術創の治癒後に於ける電撃性化膿性腦膜炎

乳嘴突起炎手術創の既に治癒の状態に達し居るに拘らず、突然化膿性腦膜炎を併發し死に至る事あるは、特に「ムコーズ」中耳炎の際に稀に經驗する所なるが、之等症例の経過は顧みて臨牀上參考たるべき點を多々有すとて、演者は昨年中に經驗したる斯かる症例に就て其経過を述べ、治療の跡を顧みて遺憾に思はれたる點を指摘したり。第1例は51歳の男、昨年9月2日シュワルチエ氏手術を行ひたるも、尚時々同側の偏頭痛並に同側齒痛を訴ふる爲、9月24日再手術(シュワルチエ手術に止む)を行ひ、顳骨突起根部並に鼓室上窩の部の遺殘細胞を除去したり。其後諸症狀略ぼ輕快し創面の治癒も順調にして、12月22日既に耳後部創面の整形手術を行はんとするに至りたる折柄、突然化膿性腦膜炎となりて死亡したるものなり。凡て「ムコーズ」中耳炎に於ては最初より根

治手術を行ふべしとなす人あるも、演者は從來原則として先づシュワルツエ氏手術のみを行ひ、之のみにて大多数の症例を治癒せしめ居り、シュワルツエ氏手術によりては尙症状の輕快に至らざるものに於てのみ再手術を行ひ、根治手術に變更するの方針を執り來たるものなるが、本例に於ては再手術に際し、遺殘細胞の搔爬に止め、根治手術を行はざりしは甚だ遺憾なる點なりと。

第2例は57歳の男、昨年5月18日シュワルツエ氏手術を行ひしも、時々頭痛、嘔氣あり。依つて7月28日根治手術を行ひ、其際小き脳膿瘍を發見し、之を排膿する事により諸症状輕快し、8月6日退院、爾來通院し居たりしものなるが、退院後5日目に突然化膿性腦膜炎を來し死亡したるものなり。本例の経過を顧るに、第1回手術後の嘔氣頭痛、徐脈は再手術の際に發見したる脳膿瘍の存在に克く相符合するものありて、瑣細なる諸症状も疎かにす可からざるものたるを實例を以て教へられたると共に、更に本例に於ては、脳膿瘍を有せしに拘らず、再手術後10日目に退院を許可したるは無謀なりと云ふべく、本例に於て慎重に経過の觀察治療に勉めたらんか、或は治癒に導き得たるやも知れずとて、特に脳膿瘍の後療法に當りては深き注意を以て當るべしと述べたり。

追加 山 口 治

既に手術の時期を失したる喉頭癌患者に、第1【回目は2150mg時、第2回目は1056mg時の「ラ

ヂウム」照射を行ひしに、第2回目の「ラヂウム」照射後、喉頭軟骨膜炎を來したるにより、其後は「レントゲン」照射療法のみを數回行ひたり。其後暫らく此患者を診る機會なく、恐らく増悪死亡せるに非ずやと思ひ居りしに、最近(第1回「ラヂウム」照射後滿2年目に)同患者の來訪を受け、病勢の著しく輕快せるを見、且甚だ元氣に日々活動せるを知り、放射線療法の偉効に一驚を喫し居れり。

結 辭 田 中 文 男

再發せる症例に於ても、或る場合に於ては前述の如く「ラヂウム」療法により偉効を收め得る事あり。されば初期の癌腫、殊に喉頭癌に於ては、喉頭截開術を行ひ得る時期のものに於て之を應用するを得ば、恐らく好結果を齎し得ると考ふ。尙余は「ラヂウム」照射を喉頭截開術後に應用せば從來よりも更に良結果を齎し得るものならんと考へ居れり。次に喉頭癌に於ては「ラヂウム」の照射量の多量に過ぐる際、往々喉頭軟骨膜炎を惹起し困却する事あり。依つて余は斯かる合併症を成るべく避くる爲、他方又「ラヂウム」照射の効果を今一步進め得るに非ずやとも考へ、多少研究的に最近は500乃至1000mg時の照射を1—2箇月の間隔を置いて數回行ふの方法をとり居れり。

閉會の辭

北 野 伊 八 郎